
ロボット選手

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボット選手

【Nコード】

N4180V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

阪神に何とロボットの助っ人が来た。だがその助っ人は妙に人間臭くしかも阪神が大好きで。空想科学祭2011企画作品です。

第一章

ロボット選手

阪神タイガーズ、何かと話題になりどんな勝ち方をしてもどんな負け方をしてもそれが絵になり美しいチームがだ。またまた話題を提供してくれた。

何とだ。今度の助っ人は。

「ロボットですわ」

フロント側のその発表を聞いてだ。皆まずはこう思った。

「プロ野球の協定を無視してか」

「というかロボットすら助っ人にしないと優勝できないチームだったんだな」

「やっぱり阪神だよな、そこは」

「今度はそう来たか」

皆呆れながらもだ。何処か納得していた。

これが阪神であった。そしてその阪神の助っ人、ロボットのそれは。

一見すると普通の助っ人である。何故か髭を生やしているのはおそらくかつての助っ人バースを意識してのことであろう。その彼の名前は。

「ランディ＝オマリーですわ」

「うわ、まんまやるが」

「バースとオマリー合わせただけやないか」

「もうちょっとひねれや、そこは」

「ほんまや、芸がないのう」

「そこんところがなあ」

だがそれでもだ。彼等は文句を言いながら納得した。阪神ファン達にとってはどちらも非常に親しめる名前だからだ。それで、である。

彼等はその助っ人の入団を受け入れた。ポジションは外野、レフトになった。一応打撃と肩に重点を置いたというのだ。そうしたロボットの助っ人だった。

そのオマリーはキャンプでだ。早々にこんなことを言うのだった。

「わて、阪神日本一にさせますで」

「ほい来た、猛虎日本一宣言」

「それ実際にできた人間ってバースだけやさかいな」

「まあそれできたらほんまもんやけれどな」

「まず無理や」

皆冷めていた。それは何故か。阪神だからだ。

阪神に絶対という言葉はない。絶対に優勝できる状況からあえなく敗れるのが得意技だ。それこそバースでなければ優勝させられなかったのだ。日本一にだ。

だが彼はだ。堂々と言うのだった。

「わては阪神を勝たせる為に生まれてきたんですから」

「ほなちゃんと打つんやぞ」

「まあ期待せんで待つたるわ」

「精々頑張りや」

ファンはこんな調子だった。こうしてそのロボット助っ人の野球人生がはじまったのであった。すると。

いきなり打った。打って打って打ちまくった。何と打率四割で得点圏打率に至っては五割を超えている。ホームランも四月の時点で何と八本だ。これはかなりのものだった。

「おい、打つやんけあいつ」

「めっちゃくちゃ打ってるで」

「まるでマシーンやな、あいつ」

「アホ、ロボットやロボット」

こんなベタなやり取り取りまで行われてであった。とにかくだ。

彼は打って打って打ちまくりだ。しかも守備もだ。

足はあまり速くはない。そこに重点を置いて開発製造されたロボ

ットではないのだ。だが打球反応にグラブ捌きも的確でしかも送球は正確かつ凄く速さだった。まさに強肩であった。

甲子園の広いグラウンドでも何の問題もなく守れる。見事なレフトであった。

「ええなあ。守備もいけるんかいな」

「確かに足はあまり速くないけれどな」

「けれどあんだけ守れたら凄いわ」

「充分やで」

ファンは守備にも太鼓判を押ししたのであった。

「こりゃひよつとしたらじひよつとするな」

「阪神優勝させてくれるで」

「ああ、バース二世や」

常に言われる言葉がここで出た。

「神様仏様の再来やで」

「来たで救世主が」

こうだ。ファン達はオマリーを崇拜しかねない目で見えるようになった。頼りになる選手ならどんな相手でも応援する。これが阪神ファンである。

その彼等の期待に応えてだ。オマリーは。

終盤になっても打ち守りだ。チームを勝たせてきた。そしてこのシーズンの甲子園球場でだ。

相手は阪神ファン、いや良識ある日本国民共通の敵である憎むべき巨人だ。その巨人相手になるとオマリーはとりわけ燃えた。

第二章

一打席目からタイムリー、出る打席で常に打ちだ。打点を重ねていった。気付けば彼一人で巨人を完膚なきまで粉砕してである。

優勝を決めた。阪神の監督が胴上げで宙を舞う。そして次に。

「よし、オマリーや！」

「オマリーの胴上げや！」

「優勝させてくれたんはオマリーのお陰やからな！」

選手達だけでなくファン達も歓喜の声の中で言っただ。彼を胴上げしようとする。

しかしここでだ。彼は言うのであった。

「いや、それはまだや」

「まだ？」

「まだなんかいな」

「まだ日本一があるで」

実に流暢な関西弁でこう言うのである。

「そやから。まだや」

「そやな。言われてみればや」

「まだ日本一があるんや」

「日本シリーズに勝ってこそや」

「ほんまの優勝や」

誰もがこう言い合う。そしてそのうえでだ。

彼等は思い出していた。かつての千葉ロッテマリーンズとの日本シリーズを。あの見事なまでに惨敗したシリーズを思い出してだ。言うのであった。

「あんな負け方はコリゴリや」

「日本一になってこそホンマや」

「それやったら」

「阪神は日本一になるんや！」

オマリーも高らかに叫ぶ。

「胴上げはそれからや！」

「そや。日本一になってや！」

「オマリー胴上げや！」

「そうすんで！」

誰もがそのロボットである筈のオマリーを囲んで熱く言うのであった。彼等は今一つになっていた。オマリーを中心に置いたうえで、彼等は一丸となってシリーズに挑む。その中での。

まずは第一戦だ。阪神は一回から攻めたてランナー一、二塁。ここで。

「三番レフトオマリー」

大歓声の中バッターボックスに向かうのはそのオマリーだった。彼は。

一球目からだ。ボールを見据えて大きく振った。そうしてだ。

ボールはスタンドの最上段に突き刺さった。ライナーでそこまで突き刺さる凄まじいホームランだった。それを放ったのだ。

この第一戦での先制アーチがだ。まず阪神を勝たせた。

そしてだ。第二戦ではだ。

同点で迎えた七回にだ。彼の打順が来た。マウンドにいるのは相手チームの誇る中継ぎエースだ。頭腦的な投球で知られている。

「あいつコントロールええからなあ」

「しかも変化球の数も多いで」

「ロッテにおつた小宮山みたいな奴やからな」

阪神ファンの席からこういう声が出る。

「オマリーもロボットやから頭はええけど」

「あいつはミスターコントロールでしかも頭はスパコンや」

「世界一のや」

二番ではない。この辺りマスコミに甘やかされているだけで大臣にまでなれた襟を立てるだけ取り得の女性議員とは違っている。

「あれを打てばこの試合も勝てるんやけれどな」

「どないや？難しいんちゃうか？打つのは」

「防御率零点台やしな」

そこまで完璧なピッチャーが相手だ。如何にオマリーといえども打てないのではないのかと周囲も考えた。その彼がバッターボックスに入る。

彼はここでは粘りに粘った。ボールをよく見てボールになる球は見送りストライクになる球はことごとくファールにしてみせた。そうして勝負を続けたのだ。

投球は十球を超えて十五球に至った。しかしそれでもだ。

オマリーはボールをカットし続ける。それを見てだ。

まず相手チームの方からだ。苛立ちの声が出て来た。

「おい、打つ気ないのか？」

「早く打てよ」

「それで終わらせろよ」

彼等はじれだしていた。そしてそれは。

マウンドの相手ピッチャーもそうであるしベンチもだ。それでだ。

第三章

彼等はじれるあまり判断を誤った。甘いボールを甘い場所に投げてしまったのだ。

それを観てだ。彼は。

「もろた！」

そのボールを一気に振り抜いた。そうしてだ。

ホームランを放ちだ。そのピッチャーから点を奪った。これがシリーズの流れを決めてしまった。

阪神は日本一になり彼は見事シリーズMVPに輝いた。言うまでもなくロボットとしてははじめての日本シリーズMVPである。

彼は甲子園で胴上げされた。その時だ。

ナイン達からは苦笑いと共にこう言われた。

「おい、重いな」

「やっぱりダイエットした方がいいだろ」

「それに身体も硬いぞ」

「ロボットやから仕方ありまへんわ」

これが彼の言葉だった。

「けどこの体重でホームラン打って硬いからデッドボールも平気でつせ」

「ははは、そうだよな」

「確かにそうだよな」

彼のその言葉にだ。ナインもついつい笑ってしまった。彼の力で阪神は日本一になったのだ。そしてそれだけではなくだった。

チームの雰囲気もだ。彼によってだ。

明るくなりそれでいて。練習もよくなっていた。

そうしてだ。その次の年もまた次の年もだった。

阪神はペナントを制していった。日本一にもなった。まさに黄金時代だった。オマリーはその中でだ。またしても言うのであった。

「もう巨人の時代やないで！」

「そや、阪神の時代や！」

「巨人はもう終わったんや！」

「あんなチームはカスやカス！」

こうだ。他の選手達も言う。まさにオマリーの言う通りだった。オマリーは練習を続け成績を残しチームを優勝に導いていった。だが、だった。

やがて選手として満足に動ける限界が来た。それを受けてだ。彼は引退を決意した。その引退試合においてだ。

最後の最後の打席でもホームランを打ちだ。チームを勝利に導き。彼は試合終了後グラウンドにおいてマイクを手にしてだ。甲子園の満員の観客達に言うのだった。

「おおきに！」

まずはこの一言からだった。

「わてロボットやけれど選手として愛してくれた皆さんおおきに！」
こうだ。涙を流しながら言うのであった。

「阪神ファンはサイコーや！わて阪神に入ってよかったですわ！」

「あんたは確かにロボットだ。けれどな！」

「阪神の選手だよ！」

こうだ。ファン達はその彼に伝えて声をかけた。

「最高の阪神の選手の一人だったよ！」

「野球選手だったんだよ！」

「ロボットでも？」

これにはだ。オマリーの方が驚いた。涙に濡れたまま呆気に取られた顔になってだ。そのうえで彼等の言葉を聞いてであった。彼はだ。こう言ったのだ。

「阪神の選手。わてが」

「そや。阪神の為に野球してくれて夢見せてくれた！」

「それが証拠や！」

「あんたは最高のロボットで最高の阪神の選手やったで！」

熱い声援だった。まさに彼等の愛する阪神の選手に対するそれだった。

そしてだ。彼等は。

グラウンドに雪崩れ込みそのうえでだ。ナイン達と合流して。オマリーを囲みそれから。高々とあげたのだった。

「おおきに！」

「あなたのことは忘れんで！」

「絶対にや！」

「日本一有り難うな！」

「あなたのお陰や！」

こうだ。彼がロボットかどうかなぞ最早どうでもよかった。彼を阪神の選手として胴上げしたのだった。

胴上げをされながらオマリーは宙を舞いつつ号泣していた。そしてだった。

その涙の中でだ。こう叫んだ。

「ほんま、阪神ファンは最高や！」

こうして彼の阪神の選手としての活躍は終わった。だが彼はその後でだ。

阪神記念博物館、阪神の歴史資料や選手達の逸話、使用していたユニフォームやグローブ、バットなどを集めたそれを造りだ。その館長になり言うのだった。

「最高のチームの為にこれからも働きますねん」

そして自分がロボットでありその彼を温かく受け入れた彼等のことと話すのだった。オマリーはロボットである。だがそれと共にだ。彼は素晴しき野球選手、阪神を愛する野球人だった。その心は紛れもなく人間の熱いものだった。

ロボット選手

完

2
0
1
1
·
7
·
1
1
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4180v/>

ロボット選手

2011年8月2日03時29分発行